

でも世界との共鳴という項目では、プログラム前後で減少するという近しい事象が観察されている。これらの結果から推測できることとして、参加者自身が思い描いていた社会課題や多文化への適応能力を実際に体験したことで、想像と現実のギャップがこの結果として現れた可能性がある。この変化が何に起因しているかは、非常に興味深いところであり、今後のプログラムを運営における文化的な側面や考え方や感じ方の違いを分析する上での大きな足掛かりとなるだろう。プログラムを通して、学生たちの考え方にどのような変化をもたらしたかをタイムリーなインタビュー調査などで掘り下げることができれば、より精度の高いプログラムの改善に繋がる。

今回の調査では回答者がシンビオシス国際大学生は 4 人と少なく、一般化できるほどの結果が得られていないのは考慮しておく必要がある。事前と事後の両方を回答した学生は千葉大生は 73.3%、シンビオシス国際大学生は 40%、レスター大生が 60%となる。母数が少ないことによる一般化が難しくなる点を避けるため、回答率を上昇させるという課題は引き続き検討していく必要がある。特に調査のための質問数が合計で約 70 問と多くなることは、学生にとって負担となってしまうことも予想できることから、プログラム内でも回答する時間を十分に設けることや、質問項目について不明点などがすぐ聞けるように大学スタッフが近くにいる状態で質問調査を実施するなどといった工夫を検討していく必要がある。

3-4 外部評価

3-4-1. GRIP 外部評価委員会の概要

外部有識者から評価を受けプログラムの質の向上を図るため、GRIP 推進委員会の規定を整備し GRIP 外部評価委員会を置くことを定めている。GRIP 外部評価委員会は、日本、並びにアメリカ等の国外の有識者を委員とし、年に 1 回開催する。2023 年度はカタールと南アフリカより海外における IPE の有識者として新たに 2 人の外部評価委員を招待し、より多様性のある意見を取り入れることができた。一年間のプログラム運営のプロセスおよび学習成果を、本年次報告としてだけでなく活動実績や今後の計画を資料としてまとめ、客観的に本プログラムを評価していただき、次年度以降のプログラム改善の基盤とする。

2023 年度の外部評価委員会は、2023 年 6 月にオンライン会議にて日本、アメリカ、イギリス、カタール、南アフリカを繋ぎ実施された。それぞれ、異文化感受性、国際交流プログラムの評価、地域創生に精通した 6 名の外部評価委員より、プログラムの目的や問題解決に取り組む際の各国の社会システムの捉え方等についての活発な議論が交わされた。

3-4-2. 評価方法

GRIP 外部評価委員会による評価は、年間のプログラム運営プロセスと学習成果を包括的に検討することを目的としている。評価の具体的な方法は以下の通りである。

①外部評価委員会資料の準備

- ・ 年次報告書
- ・ 活動実績のまとめ
- ・ フィールドワーク先や学生からのフィードバック
- ・ 今後の計画

②評価委員会の実施

日時：2023 年 6 月（日本語・英語で各 1 回）

形式：Zoom によるオンライン会議

評価委員：6 名の専門家（異文化感受性、国際交流プログラム評価、地域創生に精通）

評価委員出身国：日本、アメリカ、イギリス、カタール、南アフリカ

③評価プロセス

事前資料の送付：評価委員に上記の評価資料を事前に送付

活動報告：評価委員会時に資料を基に活動報告を実施

意見交換：プログラムの運営方法、評価方法、研究活動、今後の計画について意見交換を実施

アドバイス：評価委員からの改善提案や助言を収集

3-4-3. 評価結果

評価結果は、外部評価委員会において得られた意見やアドバイス、および委員会後に提出された最終評価票をまとめたものである。得られた結果は、プログラムの強み、課題と改善点、そして全体的な進捗状況の評価として下記にまとめている。以下、各項目の詳細を記す。

①プログラムの強み

外部評価委員会では、GRIP プログラムの以下の点が強みとして挙げられた。

- 学生交換プログラムの成功
レスター大学と千葉大学間で実施された学生交換が成功を収め、参加者から臨床経験と異文化体験に関する肯定的なフィードバックが得られている。この交流は学生の専門的スキルと異文化理解を深める重要な機会となっている。
- 学際的なアプローチ
公衆衛生やホームレス問題など、多様な分野を含む学際的な性質が参加者の学びに大きな価値を付加している。これにより学生は多角的な視点から問題解決能力を養うことができている。
- プログラム拡大への取り組み
カタール大学やフリーステート大学などへのプログラム拡大に向けた議論が進められており、新たな MOU（大学間交流協定）の締結が計画されている。これらの取り組みは学生交流ネットワークの拡大と多様性向上に寄与している。

- 将来の持続可能性
2025 年初頭にはグローバル IPE に関するシンポジウムが計画されており、将来の資金調達についても継続的な議論が行われている。これらはプログラムの長期的な発展と安定性を支える重要な要素となっている。

②課題と改善点

外部評価委員会では、以下の課題と改善点が指摘された：

- 非医療系学生の参加
経済学や工学など非医療系学生を臨床環境に配置することには課題があり、初期段階では医療系学生に焦点を当てることが実用的かもしれない。これによりプログラム運営がよりスムーズになる可能性がある。
- MOU（大学間交流協定）の進捗
大学間で MOU を締結するために長期的な交渉が求められるが、これはパートナーシップの正式化と学生・情報交換の円滑に行っていくために非常に重要であり、引き続き慎重に進めていく必要がある。
- プログラムの評価
学生の感想のなかにアウトカム評価と思われる内容が含まれているので記載方法は検討する必要がある。
プログラムのアウトカムは、連携実践能力や文化的能力については想定通りである一方で、問題解決能力は通常領域特異的な能力と言われており、今回測定されている社会問題解決能力の評定尺度で測定されるべき内容が学習／指導されていたのかが明確ではない。学習内容を精査し評価と学習内容の整合を図る必要がある。いずれの事前事後比較においても統計学的な検定等を含めた議論が欲しいところである。
- プログラム拡大に向けた戦略
プログラムの拡大には戦略的計画が必要であり、そのためには将来的な資金調達も考慮しつつ進めていくことが重要である。持続可能な成長と影響力ある成果提供を目指すべきである。

③最終評価票集計結果

外部評価委員会終了後に提出された最終評価票では、プログラム全体の進捗状況について以下の結果が得られた：

「予定を越えて進展」：1 名

「予定どおり進展」：5 名

この結果より、プログラムが概ね計画通りに進行していると評価した。今後は、プログラムの拡大を長期的目標に置き課題解決に取り組む。